# 三型アクセント記述研究の過去，現在，未来
## ― 隠岐島の三型アクセントに焦点を当てながら ―

松森晶子（日本女子大学）

### 1．アクセント記述研究のフロンティア ― 「三型アクセント体系」

本発表ではまず，最近あらたに発見されつつある南琉球の三型アクセント体系の特徴と，その記述上の課題を提示する。特に南琉球の諸方言については，先行研究とは異なる韻律単位を想定して調査・分析を施してみることによって，今後も三型体系の発見が成される可能性が高いことを指摘する。次に，隠岐島の三型体系に焦点を当てて，今後の共時的・通時的研究テーマを提示する。

**(1) これまで記述報告されている三型アクセント体系**

日本語　島根県　隠岐島五箇（ごか），都万（つま），中村，布施など

琉球語　北琉球　（徳之島，沖永良部島，沖縄本島北部諸方言など）

南琉球　与那国島

**(2) 最近になって，あらたに発見された三型体系**

日本語　福井県　越前町（新田 2012），あわら市（松倉 2014）

琉球語　南琉球　宮古諸島の多良間（たらま）島（松森 2010，五十嵐 2015），

池間島（五十嵐・田窪・林・ペラール・久保 2012）

宮古島の与那覇（よなは）（松森 2013）・狩俣（かりまた）（松森 2015）

八重山諸島の黒島・小浜島・西表島古見（こみ）など（松森 2015）

### 2．　三型アクセントの発見と今後の記述研究のテーマ（南琉球を例にして）

#### 2．1．記述の道具だてに関する「発想転換」の必要性

平山ほか（1967）以来とられてきた従来の記述方法は，単純名詞に nu（主格）や nudu（主格＋焦点）などの「代表的な」助詞（助詞連続）を付け，その「文節」内の型を観察するというものだった。しかしそのような方法では，宮古・八重山諸島の三型体系の発見にはつながらなかった。

南琉球の多くの方言では，「味噌＋甕 =から(出した)」「アダン＋木=の 葉=も（見える）」のように比較的長い文節や句を作成し，その中で観察することによってはじめて，三種の型の明瞭な区別が観察できる（松森 2013, 2014, 2015；五十嵐 2015; Igarashi et al. forthcoming)。また南琉球では，（従来の「モーラ」という韻律単位に加えて）次のような韻律上の単位を想定する必要がある。

**(3) 宮古・八重山諸島に想定される韻律単位　（本発表では，これを仮に「 *P* 」と呼ぶこととする。）**

a. 名詞ひとつ（**mami** ）　　b. 名詞＋1 モーラ助詞　（**mami =nu** ）

c. 複合語の語根（前部要素，後部要素）　（**mami** ）＋（**kii** ）　「豆木」

d. 複合語の語根（後部要素）＋1 モーラ助詞　（**mami** ）＋（**kii=nu** ）「豆木の」

e. 2 モーラ以上の助詞　（**kara** ）　　f. 2 モーラ以上の助詞＋助詞　（**kara=du** ）

松森（2015）は，この韻律単位が，一部の宮古諸島の方言に想定されるだけでなく，宮古・八重山諸島全般にわたって想定される単位であることを論じている。また松森（2015）は，この韻律単位は宮古・八重山祖語の段階から存在した，という通時的な仮説をも提示した。

琉球アクセントの記述研究では，宮古語の諸方言は全般的にアクセント型の区別が不明瞭で，「曖昧化」あるいは「一型化」の途上にある，とされてきた。しかし，韻律単位についての発想を変えることによって，この地域に今後も，三型体系が発見される可能性が高くなってきた。

## ２．２．韻律単位 *P* は南琉球諸方言アクセントの「仕組み解明」にも役立つ

このようにモーラや音節より大きい韻律単位 *P* を想定すると，南琉球諸方言のアクセントの仕組み（どんな規則や原理に支配されているのか）の解明にも役立つ。以下，このことを論じよう。

●八重山諸島の黒島方言は明瞭な三型体系を持ち，「A 型：文節全体を通して急激なピッチの下降（アクセント）がない」，「B 型：文節内部の２つ目の *P* に下降」，「C 型：文節内部の１つ目の *P* に下降」と記述できる。ところが次の例では，C 型の「１つ目の *P* 」に下降が出現しない。

**(4) 黒島の三型アクセント　（C 型のアクセント交替に着目して）**

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| [A 型] | fu[ cji | kiNna… | （口よりは～） | a[ bu | kiNna… | （洞窟よりは～） |
| [B 型] | [ aN | kiN] na… | （網よりは～） | ja [ ma | kiN] na… | （山よりは～） |
| [C 型] | usji | kiNna… | （臼よりは～） | funi | kiNna… | （舟よりは～） |
| | hami | kiNna… | （甕よりは～） | nabi | kiNna… | （鍋よりは～） |

しかしその下降は，同じ C 型の名詞に１モーラの助詞 nu が後続した次のような場合には出現する。

**(5) 黒島の C 型名詞末尾に下がり目が生じる場合**

u[ sji ] nu …（臼が～），　　fu[ ni ] nu …（舟が～），

u[ sji ] nu naha hadu…（臼の中にゾ～），　fu[ ni ] nu naha hadu…（舟の中にゾ～）

このことは，「名詞＋1 モーラ助詞」から成る（**usji nu**）がひとつの *P* を形成しており、黒島アクセントは，「***P* の全体のモーラ数が３モーラ以上**」という条件のもとに出現することを示す。

●同じような条件が，宮古島の与那覇方言の H 音調の出現にも関与している。この方言では，３モーラ名詞に，全体として３モーラの助詞連続 meedu （並列助詞 mee＋焦点標識 du）が後続した場合に，次のような二種類の明瞭な型の違いが出現する。

**(6) 与那覇の３モーラ名詞 ＋ meedu の音調型**

[AB 型] budui [meedu ]…（踊りもゾ～）　　kagaM [meedu ]…（鏡もゾ～）

[C 型] [fusui ] meedu …（薬もゾ～）　　[pasaM ] meedu …（鋏もゾ～）

しかし２モーラ名詞に同じ助詞を付けると，AB 型と C 型の区別は中和してしまう。

**(7) 与那覇の２モーラ名詞 ＋ meedu の音調型**

[AB 型] saki [meedu ] …（酒もゾ～）　　jama [meedu ] …（山もゾ～）

[C 型] nabi [meedu ] …（鍋もゾ～）　　puni [meedu ] …（骨もゾ～）

ところが２つの型の違いは，この２モーラ名詞に１モーラの助詞 nu を付けると，出現する。

**(8) ２モーラ名詞に「～の他はない～nu　pukaa　njaaN」を後続させた場合の音調型**

[AB 型]　saki nu　[pukaa] …（酒の他は～）　jama nu　[pukaa] …（山の他は～）

[C 型]　[nabi nu]　pukaa …（鍋の他は～）　[kami nu]　pukaa …（甕の他は～）

与那覇でも，(nabi nu) がひとつの *P* を形成し，黒島と同じく「***P*** **の全体のモーラ数が３モーラ以上**」という条件のもとではじめて H 音調が出現する，と考えれば，この事実が説明できる。

**(9) 与那覇方言の「２モーラ名詞＋の他は（～nu pukaa）」の音調実現**

[C 型]　**(na　bi　nu )　(pu　ka　a )** …　（鍋の他は～）

<μ　μ　μ>　<μ　μ　μ>

H　L

以上の２つの方言は，その H 音調が表面（音声レベル）に出現するか否か，という点に違いがあると捉えることができる。たとえば [C 型] の２モーラ名詞「鍋 nabi」に，全体が 3 モーラとなる助詞連続が続くと，与那覇方言では H 音調が実現するのに対して，黒島方言では実現しない。

**(10) 与那覇方言と黒島方言の比較**

**a.**　与那覇方言の場合　（鍋もゾ～）

*** ( na bi )　( me e　du )** …　→　**{ na bi　me e　du }** …

<μ　μ>　<μ　μ　μ>　　μ　μ　<μ　μ　μ>

これは許されないので，韻律構造を組み替えて H 音調を実現させる。

H　L　　H　L

**b.**　黒島方言の場合　（鍋よりは～）

*** (　nabi　)　(　kiN na　)** …

<μ　μ>　<μ　μ　μ>

これは許されないので，H 音調はそのまま実現させないでおく。

H　L

*P* を想定すると，この２つの方言の仕組みには，次のような共通点と相違点があることが分かる。

**(11) 与那覇方言と黒島方言のアクセントの仕組み（その共通点と相違点）**

共通点：H 音調が，「***P*** **の全体のモーラ数が３モーラ以上**」という条件でのみ出現する。

相違点：**「H 音調は，かならず出現しなければならないか？」**　→ **Yes　与那覇**

(obligatoriness についての方言間の違い)　→ **No　黒島**

このように *P* の想定は，諸方言の仕組みを（その共通点と違いも捉えて）記述するのに役立つ。

## ３．　隠岐島の三型アクセント（五箇方言に焦点を当てて）

本発表では隠岐島の三型体系について，次のような研究課題をあらたに提示する。

**●隠岐島の三型体系は，あらたに発見された福井県の三型体系と同系統ではないか。**

**●式保存（前部要素支配型）の複合語アクセント規則が，成り立っていたのではないか。**

## ３．１．隠岐島方言の音調型

**(12)隠岐島五箇方言の音調型**　話者：ON氏　(男，昭和23年五箇生まれ，五箇生まれ，五箇在住)

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A（鳥） | トリ | トリが | トリから | トリからも | トリからしか | トリからまでも |
| B（山） | ヤマ | ヤマが | ヤマから | ヤマからも | ヤマからしか | ヤマからまでも |
| C（雨） | アメ | アメが | アメから | アメからも | アメからしか | アメからまでも |
| A（車） | クルマ | クルマが | クルマから | クルマからも | クルマからしか | クルマからまでも |
| B（紅葉） | モミジ | モミジが | モミジから | モミジからも | モミジからしか | モミジからまでも |
| C（鼠） | ネズミ | ネズミが | ネズミから | ネズミからも | ネズミからしか | ネズミからまでも |
| A（金持ち） | カネモチ | カネモチが | カネモチから | カネモチまで | カネモチまでも | カネモチからまで |
| B（朝顔） | アサガオ | アサガオが | アサガオから | アサガオまで | アサガオまでも | アサガオからまで |
| C（鶏） | ニワトリ | ニワトリが | ニワトリから | ニワトリまで | ニワトリまでも | ニワトリからまで |

## ３．２．隠岐島三型アクセントの解釈

**(13) Haraguchi（1991）の解釈**　[久見のアクセント体系]　C型を無核としていた。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A型 | (2拍目にアクセント)： | | カゼ | サカナ | カネモチ | タカラモノ |
| B型 | (1拍目アクセント)： | 柄 | ヤマ | ココロ | アサガオ | リコウモノ |
| C型 | (アクセント無)： | 絵 | アメ | ウサギ | ニワトリ | ワタシブネ |

● **再解釈**　松森(2011a)は，A型を無核，B，C 型を有核の型とする説を提示した。

**(14) 隠岐島五箇方言のアクセント体系**（松森2011a）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 名詞 | A型（無核）： | カゼ | クルマ | カネモチ | タカラモノ |
| | B型（2拍目アクセント）： | ヤマ | ココロ | アサガオ | ウルウドシ |
| | C型（1拍目アクセント）： | アメ(雨) | ウサギ | ニワトリ | ワスレモノ |

助詞　が，も，に，だけ，から，まで，しか，さえ，ぐらい（無核）

だけ，ばかり（有核）　　問題点：1モーラ名詞

**(15) 交替のリズム構造の構築**

―無核型には，文節の頭から最大HLLから成るフットを構築（松森2011a）

| HLH | HLHL | HLLHL | HLLHLL | HLLHLLL |
|---|---|---|---|---|
| トリが | トリまで | トリからも | クルマまでも | カネモチまでも |
| クルマ | クルマが | タカラモノ | タカラモノも | トリからまでも |
| | カネモチ | クルマまで | カネモチから | タカラモノまで |

### ３．３．通時的考察　　●隠岐島と福井県の三型体系とは，同系統ではないか？

**(16) 隠岐島久見方言の三型アクセント類別体系**　(話者２名：明治 42 年生，大正１年生の女性)

１モーラ語　　1　2　/　3

２モーラ語　　1　/　2　3　/　4　5

３モーラ語　　1　2　4　/　[5]　/　[5]　6　7

**(17) 越前町小樟方言の三型アクセント類別体系**　(新田 2012)

１モーラ語　　1　/　2　/　3

２モーラ語　　1　/　2　3　/　4　5

３モーラ語　　1　(2)　4　/　[5]　/　(2)　[(5)]　6　7

**(18) 両者が同系統と考える場合の問題点　—３モーラ語　第５類**

| | 朝日 | 飽 | 五つ | 従兄弟 | 命 | 親子 | 心 | 姿 | 涙 | 単衣 | 眼 | 紅葉 | 山葵 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 隠岐島 | B | B | B | B | B | B | B | B | B | B | B | B | B |
| 越前町 | B | B | B | B | B | C | B | B | A | C | B | B | B |

| | 油 | 胡瓜 | 鰈 | 柘榴 | 簾 | 襷 | 茄子 | 柱 | 火箸 | 箒 | 枕 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 隠岐島 | C | C | C | C | C | C | C | C | C | C | C |
| 越前町 | B | B | B | B | B | B | C | B | B | B | B |

祖語における３モーラ語の型には，これまで金田一語彙で想定された７つ（ｘ類（旧３類)を入れなければ６つ）の類に対応する区別のみが前提とされてきた。しかしこれらの地域の類の分裂・合流の仕方は，今後，本土の祖体系に，それ以上の類別を建てる必要が生じることも示唆している。

### ３．４．隠岐の三型アクセント記述研究の今後の課題：　複合名詞のアクセント

隠岐の複合語には式保存は成り立っていない（上野 1984b，2012 ）という説に対し，松森 (2011b) は五箇のデータ 314 例を用い，「式保存」は一応，成り立っており，その例外にも傾向があることを示した。

**(19)**

A　水　ミズ　ミズが　　水虫　ミズムシ　ミズムシが　　虫　ムシが
B　鈴　スズ　スズが　　鈴虫　スズムシ　スズムシが
C　松　マツ　マツが　　松虫　マツムシ　マツムシが

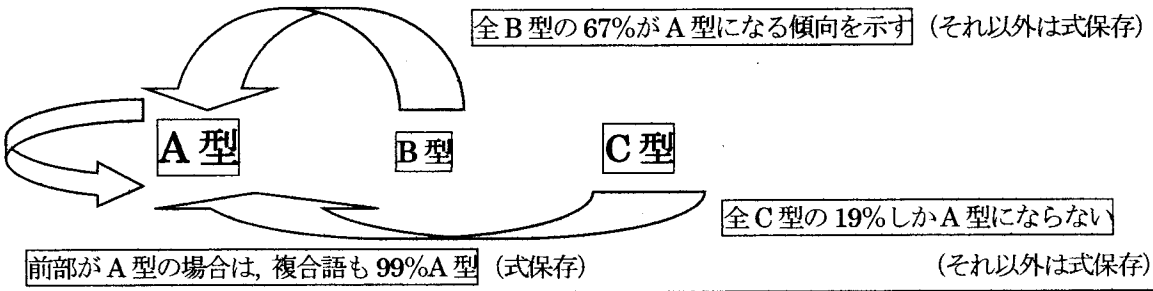
A　雉　キジ　キジが　　雉小屋　キジゴヤ　キジゴヤが　　小屋　コヤが
B　犬　イヌ　イヌが　　犬小屋　イヌゴヤ　イヌゴヤが
C　猿　サル　サルが　　猿小屋　サルゴヤ　サルゴヤが

A　小麦　コムギ　コムギが　　小麦畑　コムギバタケ　コムギバタケが　　畑　ハタケが
B　山葵　ワサビ　ワサビが　　山葵畑　ワサビバタケ　ワサビバタケが
C　苺　イチゴ　イチゴが　　苺畑　イチゴバタケ　イチゴバタケが

A　胡桃　クルミ　クルミが　　胡桃油　クルミアブラ　クルミアブラが　　油　アブラが
B　豆　マメ　マメが　　豆油　マメアブラ　マメアブラが
C　紅花　ベニバナ　ベニバナが　　紅花油　ベニバナアブラ　ベニバナアブラが
　　椿　ツバキ　ツバキが　　椿油　ツバキアブラ　ツバキアブラが

●現代隠岐島方言では，**複合名詞がA型に集約していく強い傾向**がある，と記述できる。

**(20) 複合名詞がA型に集約していく傾向（隠岐島五箇方言における）**（松森 2011b にもとづく）




**参考：外来語・新語ではB型も出現するが，5モーラ以上になるとA型とC型に収束していく傾向あり。**

A：アルバイト，クリスマス，コンクール，マイホーム，マヨネーズ，レントゲン，ケンタッキー，サンドイッチ，バレンタイン，プラスチック，ポリエチレン，マクドナルド，コレステロール…

B：ドラマ，レタス，バナナ，パイン，メロン，アメリカ，オルガン，デパート，ビタミン，フランス…

C：アルカリ，アリゾナ，ガソリン，カラオケ，キリスト，セメント，タレント，ドーナツ，アンケート，インタビュー，クーデター，コンテスト，ミュージカル，ミュージシャン，コンクリート…

●隠岐には，もともと式保存が成立していたのではないか？

## 参照文献


Haraguchi, S.1991 *A Theory of Stress and Accent*. Foris Publication; 平山輝男・大島一郎・中本正智 1967『琉球先島方言の総合的研究』桜楓社; 広戸惇・大原孝道 1953『山陰地方のアクセント』報光社; 五十嵐陽介 2015「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』8 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座; Igarashi, Y. et al.(forthcoming) Tone neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. Kubozono, H and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization* (tentative title). Mouton; 松倉昂平 2014「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』35 東京大学言語学研究室; 松森晶子 2010「多良間島の3型アクセントと『系列別語彙』」上野善道監修『日本語研究の12章』明治書院; 松森晶子 2011a「隠岐島アクセントの再解釈」シンポジウム「日本語アクセント研究の現在—N型アクセントの原理と成立」配布資料(2011.5.21開催 於神戸大学); 松森晶子 2011b「隠岐島五箇方言の『式保存』とその例外について」『音声研究』15-3; 松森晶子 2012「琉球調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16-1; 松森晶子 2013「宮古島における3型アクセント体系の発見—与那覇方言の場合—」『国立国語研究所論集』6; 松森晶子 2014「多良間島のアクセントを再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』63; 松森晶子 2015「南琉球の三型アクセント—その韻律単位に関する考察—」『日本女子大学紀要 文学部』64; 松森晶子（近刊)「声調言語としての宮古祖語」田窪行則ほか(編)『琉球諸語と古代日本語』くろしお出版; 新田哲夫 2012「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16-1; 上野善道 1983「隠岐島久見アクセント再論(1)」『言語学演習'83』東京大学言語学研究室; 上野善道 1984a「N型アクセントの一般的特性について」『現代方言学の課題』第2巻 平山輝男博士古稀記念会編 明治書院; 上野善道 1984b「類の統合と式保存—隠岐の複合名詞アクセント—」『国語研究』47 國學院大學; 上野善道 2012「N型アクセントとは何か」『音声研究』16-1



＊本発表は，科研費基盤研究(A)(課題番号26244022)「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」の助成、および国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」の支援を受けている。